

火山都市国際会議の豆知識 その九

火山都市国際会議島原大会事務局 (☎65-5540)

いよいよ国際会議の開催まで、あと4カ月余りとなりました。これまでこの連載では国際会議の雰囲気を主に伝えてきましたが、今月からは国際会議の進め方や内容について、詳しくお知らせしようと思います。火山めぐりは、先月に引き続き、アジアの火山国・フィリピンの紹介です。

『住民』、『学術』…さまざまな視点から議論

火山都市国際会議では、世界から研究者が集まり、三つのシンポジウムに分かれて議論を交わします。

- ①『火山を知る』では火山観測、噴火予知や健康問題
- ②『火山と都市』では防災、危機管理や土地利用計画
- ③『火山とともに生きる』では教育、広報活動、災害の伝承

などの内容を扱います。

これらのシンポジウムに並行して、住民や行政によるフォーラムも併せて開催されます。フォーラムでは、国、県、報道機関、市民グループなどが中心となり雲仙・普賢岳噴火災害をはじめとした火

山災害に関する諸問題について公開討論を行います。噴火災害を経験した私たちに身近なものとなるでしょう。十一月二十三日の最終日には「子ども火山Q&A」のように、家族の皆さんで参加できるイベントも企画しています。詳しい内容については、火山都市国際会議のホームページでご覧ください。

五百五十本もの講演申し込みが寄せられる

いよいよ国際会議の参加登録が佳境に入っています。六月四日現在、学術講演の申し込みが三十を超える国々から五百五十本寄せられています。すごい数ですね。

実際の参加者数は未定ですが、この号が出るころにはもっ

松島健博と行く

世界の火山めぐり

(九)フィリピンの活火山

一九九一年六月、雲仙普賢岳の火砕流災害で島原市民が悲しみに打ちひしがれているころ、フィリピンのルソン島にあるピナツポ火山でも二十世紀で世界最大の噴火のクライマックスが訪れようとしていました。

フィリピンも日本と同様に火山列島です。富士山よりも美しいと言われるマヨン火山、カルデラ湖が美しいタール火山などは何度も大きな噴火を起こし、たくさんの命を奪ってきました。しかし、ピナツポ山は五百年以上も噴火の記録がなく、人々は活火山とは思っていませんでした。

一九九一年四月に群発地震が始まり、小さな水蒸気爆発も起こるようになりました。フィリピン火山地震研究所は緊急観測を行い、警戒レベルを次第に最大まで上げました。六月九日には住民二万五千人の避難、クラーク米軍基地の撤退の後、六月十二日から爆発的噴火が始まり、避難住民は五万人に達しました。六月十五日の大規模火砕流では島原半島全体に匹敵する面積が焼け野原にな

りましたが、噴火予知の成功で避難を拒否した数十名の犠牲者で済みしました。しかし、厚く積もった火山灰による家屋の倒壊や現在も続く土石流のために約百八十人の間接的な犠牲者が出ています。

日本は火山防災先進国と言われていますが、世界にはまだまだ学べることが多くあります。火山都市国際会議の目的はまさにここにあると言えます。

(執筆: 松島健九州大学地震火山観測研究センター准教授・理学博士)



↑ピナツポ火山噴火の土石流で埋没した家屋